

を毎日行えるので、しっかりとした評価もできるし、ぐっと調子を上げていけるということと、回復期を過ぎると、次の段階をコーディネートさせてもらえることもあって、それはすごくやりがいがありました。でも、その後も良くなるし、その後にもその人には人生があるから、やるからには長く関わりたい。あとは、もっと一緒にしていく仲間がほしい。まずはクリニックの中で、理学療法士さんだって高次脳機能障害の方を診られていいと思うんですよ。別に評価をしてくれということではなくて、この人は高次脳機能障害の人だから、例えば歩行のときにこういうことに気を付けてあげたらいいとか。そこに思いが行くのと行かないのとで雲泥の差がある。高次脳機能障害だけじゃなくて認知症もそうだし、高齢の方も一緒だと思うんです。みんな人なので。多くの方が人生の先輩なので、そこは敬意を持って、否定はしたくないと思っています。自分がおばあちゃんになったときに自分より若い医者から「おばあちゃん」とか言われたら、「あんた、私の孫ちゃう」みたいに感じるところがあるじゃないですか。患者さんだからということではなくて、やはり人と人との付き合いなので。親しき仲にも礼儀ありと、そこは気をつけているつもりです。私がおさだファミリークリニックに来てから、クリニックの外の看板に「高次脳機能障害外来」と入れてもらいました。1人でも多くの方に、別に重度でなくても書類を書いてほしいというだけでもいいので、何かのときに思い出してもらえたらそれでいいかなと思っています。とはいえ、普通の住宅地の中のクリニックなので、血圧や糖尿の患者さんの方が多いですし、そういう人たちもやはり同じくらい大事にしたい。専門クリニックではない

ので、どこまでできるかわからないですけど、紹介や情報をもらったら何かしたくなるじゃないですか。そういう中で、またあれこれ首をつっこみつつ、診療していこうと思います。

最終目標は患者会？

まだ、何の目途も立っていないんですけども、患者さんが増えてきたら、同じように抱えている悩みや、逆に、「こんな楽しいことがあるよ」というのを共有できるような患者会ができたらいいなと思っています。というのも、京都にいたときに失語症の患者の会があって、その人たちに助けてもらったことがあります。当時、若い30代の失語の患者さんを診ていたのですが、麻痺もあって、患者さん自身がすごく落ち込んでいました。どんなに親身になって私が対応したとしても、同じ経験をした人からの対応があるのとは違います。回復期を経過して生活をしていた失語症の人が通院に来ていたので、「ちょっと会ってくれへん」と頼んで、そこからまた話が盛り上がってきたのを見て、支え合えるというのはすごく大事なことなんだなと思いました。悩みを打ち明けるだけではなくて、その悩みが人を助けることもある。家族だけで頑張らなくていいので、患者会をニコニコしながら見ていたいというのが最終目標です。



佐藤有美（さとう・ゆみ）

おさだファミリークリニック 医師
京都の病院でずっと教を乞うていた神経内科の医師より高次脳機能障害の方の支援について刺激を受ける。その後、滋賀県東近江市の神埼中央病院で回復期リハビリテーション病棟の専門医をし、現在は近江八幡市にあるおさだファミリークリニックで活躍中。

第2節 盲ろうの人と楽しむ芸術鑑賞会

（1）盲ろうについて

盲ろう者とは、目（視覚）と耳（聴覚）の両方に障害のある人のことです。障害の程度は各々に異なっており、大きく次の4つに分けられます。

全盲ろう	………	全く見えなくて、全く聞こえない人
全盲難聴	………	全く見えなくて、少し聞こえる人
弱視ろう	………	少し見えて、全く聞こえない人
弱視難聴	………	少し見えて、少し聞こえる人

盲ろう者のコミュニケーション方法には、点字（ブリスト（※点字用タイプライター）・指点字）、手話（接近手話・触読手話）、指文字（日本語式・ローマ字式）、筆記、手のひら書き、音声などがあります。障害の程度や発現時期（視覚障害が先に発現したか、聴覚障害が先に発現したか）、生活環境によりコミュニケーション方法が異なります。例えば視覚障害が先に現れた方のコミュニケーション方法は音声や点字です。聴覚障害が先に現れた方のコミュニケーション方法は手話や筆記であるなどの違いがあります。（神奈川県聴覚障害者福祉センターHPより引用）

（2）鑑賞会の概要

NO-MA企画展「ボーダレス・エリア近江八幡芸術祭『ちかくのたび』」を会場に、盲ろうの人、また、ともに芸術を楽しみたい人が集う芸術鑑賞会を開催しました。

「盲ろうの人と楽しむ芸術鑑賞会」

日時：10月18日(金) 13:00～15:00 会場：奥村家住宅、まちや倶楽部

参加者：29人（うち当事者6人）

鑑賞会は前半と後半の二部構成で行いました。前半は、展示会場である奥村家住宅で木彫作品を触って鑑賞し、NO-MA学芸員が作品解説をしました。後半は、まちや倶楽部に移動し、紙粘土や身近な素材を使って作品制作をしました。作品制作のテーマは、鑑賞して印象に残ったものや事前に考えてきたもの等様々で、自由に制作しました。制作した作品を参加者同士で鑑賞し、感想を交換し合った後、アンケートに答えていただき、鑑賞会を終了しました。

(3) 鑑賞会実施までの流れ

1

「NPO 法人しが盲ろう者友の会」へ協力依頼



2

しが盲ろう者友の会の生活訓練「たっち」見学

当事者、支援者からのヒアリング、普段の活動の様子を知るため、しが盲ろう者友の会の日中活動の場「たっち」(近江八幡市安土町)を訪問。盲ろうの方が主体的にできることを活動の柱としているとのことで、訪問したこの日は調理活動として、それぞれ包丁を手に味噌汁作りをしていました。コミュニケーションは通訳介助者がマンツーマン対応で「触手話」(※1)、「手のひら書き」(※2)で行っていました。



※1「触手話」は話し手が手話を表し、盲ろう者がその手に触れて伝える方法

※2「手のひら書き」は盲ろう者の手のひらに指先等でひらがなやカタカナ、漢字等を書いて言葉を伝える方法



3

部内打ち合わせ

しが盲ろう者友の会の活動見学を受けて、鑑賞会は盲ろう者が主体的に楽しめる「触れる作品の作品鑑賞」と「粘土と身近な素材を使用した作品制作」の二部構成にしました。



4

広 報

鑑賞会の情報をケアサービス推進課が運営している、滋賀県内の福祉の魅力を発信するウェブサイト「SHIGA-FUKU」、NO-MAフェイスブックに掲載。
しが盲ろう者友の会の会員以外にも、興味のある人、一緒に楽しみたい人にも参加していただけるように情報発信しました。



5

しが盲ろう者友の会の支援者との打ち合わせ

鑑賞会に向けた事前準備や当日の詳細について検討しました。

盲ろう者へ情報を伝える方法は、話した内容を手話にし、その手話を通訳介助者が見て盲ろう者に触手話・手のひら書きで伝える2段階方式で行われます。

盲ろう者に一度にたくさんの情報を伝えることは、本人にとっても、通訳介助者にとってもかなりの負担になります。そのため、事前に「たっち」を訪問し、鑑賞会について説明することとしました。また、当日の鑑賞会のイメージを持ってもらうため、作品を持参し、実際に触れて鑑賞いただくこととしました。

また当日参加される通訳介助者がスムーズに通訳ができるように事前に出展作家と作品の情報を伝えることにしました。



6

鑑賞会チラシの点字版を作成

点字を使う盲ろうの方を対象に、自宅等でも確認できるよう、点字のチラシを作成しました。



7

しが盲ろう者友の会支援者と鑑賞会の会場下見

会場内の段差や移動ルートについて、しが盲ろう者友の会の支援者と現地で確認をしました。



8

鑑賞の内容について事前レクチャー(2回に分けて実施)

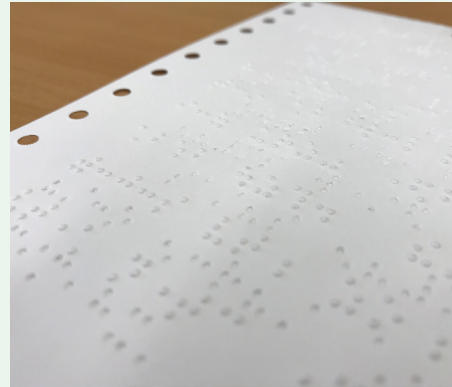
「たっち」を訪問し、鑑賞会のスケジュールや内容をお伝えし、実際の作品にも触っていただきました。点字が読める方には点字チラシもお渡ししました。鑑賞会の説明を通して通訳に関する以下の配慮事項を確認しました。

- ・話す人は初めに自分の名前を言う。(見た目や声で判別できないため)
- ・ゆっくり、長くならないように話す。(2段階で伝えるため)
- ・手話に置き換えるのが難しい言葉もある。(カタカナ語など)
- ・たとえ話は混乱する可能性がある。

(4) 鑑賞会の特徴

○点字チラシ

点字を使う盲ろうの方を対象に、自宅等でも確認できるよう、点字のチラシを作成。



点字のチラシ

○事前レクチャー（2回に分けて実施）

しが盲ろう者友の会の会員の方を対象に、事前に鑑賞会のスケジュールや内容を伝えました。また、作品にも触れてイメージをもってもらいました。

○触れる作品

NO-MA企画展「ボーダレス・エリア近江八幡芸術祭『ちかくのたび』」において触れる作品を展示している「奥村家住宅」を鑑賞会場にしました。

手で触れて木彫作品を鑑賞していただきました。作品をじっくり鑑賞し、質疑の時間を確保するため、鑑賞する作品は一人の作者に絞りました。

○伝わりやすい作品解説

学芸員の作品解説は、事前にしが盲ろう者友の会と共有した作者紹介テキストを基にゆっくり、簡潔に進めました。

※盲ろう者の通訳は、通訳介助者が手話を見て盲ろう者に触手話・手のひら書きで伝えるため、内容は短く、わかりやすくしました。

【鑑賞会終了後】

レポートをNO-MAフェイスブックに掲載。

盲ろうの方について広く知っていただけるように、鑑賞会の様子や工夫した特徴などの情報をレポートという形でNO-MAフェイスブックに掲載しました。



（５）参加者の声

アンケート回答者：18人（当事者3人、一般参加者8人、通訳介助者7人）

当事者の声

- 畳だったので歩きにくかった。くつのままが歩きやすいです。トイレに行く時、敷居が高かったので通るのに不便だった。
- 重要な会議等であれば、レクチャーがあった方が良いが、今回に関しては、「サプライズ」も含めてない方が良いと思う。
- 粘土作りは久しぶりで楽しかったです。
- 目が見えなくなってから「見る鑑賞」を諦めていましたが、「触れる鑑賞」で新しい発見がありました。

一般参加者の声

- 鑑賞後の作品制作が楽しかった。
- 視覚障害の人の作品と聞いて感動。
- 作品作りの時間が足りなかった。
- 「じっくり鑑賞する」「じっくり制作する」ということをしてもよいかと思いました。そして、できれば後の感想は時間をかけて話し合いたいと思いました。
- 想像することの大切さを改めて感じました。ありがとうございました。
- 意見の交換などができてとても楽しかったです。ありがとうございました。
- 作品を見て楽しむこと、作ることを楽しむことがアートの良い所だと再確認できたよい経験でした。
- とても濃い時間をありがとうございました。
- 盲ろうの方が、どのように鑑賞されるのか実際に側で同席させていただき、介助の方とペアになって鑑賞体験される状況などを見られて貴重な機会となった。

通訳介助者の声

- 触って感じる事が盲ろうの方にとって、本当に大切。意欲につながるということを感じました。まちや倶楽部の酒蔵（作品制作会場）についても、とても興味を持たれていました。
- 来年も粘土作りが良いなと思う。または、他の素材で何かを作るのも良いと思う。
- 一般参加者の方と一緒に粘土で作品づくりをした後、その方々が盲ろう者さんに感動したなど伝えてくださったので、良かったなと思いました。

【質問】 鑑賞会で通訳介助をしていて難しいと感じる場面はありましたか？

- 回りの状況を丁寧にお伝えしようとする時間がたっぷり必要だと感じました。また、安全面を考えても時間と空間（広さ）の余裕が必要だと感じました。
- 自分の感性が影響しないか心配でした。まず、作品を触ってもらう→その後、説明すると盲ろう者の素直な意見が聞けたと思いました。
- 少しは見える方の場合、会場を明るくしてもらえると良いと思う。
- コミュニケーションをとるのが難しい方でしたので説明がどこまで通じているのかわかりませんでした。でも少し見える方なので触ったりして楽しんでおられるように思いました。

【質問】 盲ろうの方が楽しんでおられた場面や困っておられた場面などお気付きになったことがあれば、教えてください。

- 触ることから色々なことを想像し、たくさん疑問を持たれ、「知りたい」という意欲が湧いてくるお姿を目の当たりにすることができました。
- 粘土作りが一番楽しかったそうです。触手話通訳するときは、出来れば椅子に座るか、立って通訳するとしやすいと思う。畳の上に座るのはちょっとやりにくかった。
- 作品を実際に触られた事は、盲ろう者に作品及び状況のイメージができやすく、関心が高まる学習につながる事と思う。

(6) 考察

自宅で介助者がいない状態でも鑑賞会のスケジュールについて確認できるよう点字のチラシを作成しましたが、実際に事前レクチャーで点字チラシを活用された方はお二人でした。やはり、障害の程度や発現時期（視覚障害が先に発現したか、聴覚障害が先に発現したか）の違いがあり、コミュニケーション方法も点字だけでなく、手話や手のひらがきなど人により違いがありました。

しが盲ろう者友の会理事の久郷慶子さんは「盲ろう者は他者からの関りがないと自分からコミュニケーションがとれず、だんだんとコミュニケーションの方法や自分の名前を忘れていったり、他者と関わることなく自宅で過ごすことが多くなる」とおっしゃっていました。

鑑賞会の案内はチラシやウェブで発信しましたが、やはり、自ら情報を得ることが難しい状態に置かれており、他者からの関わりが必要です。今回の鑑賞会についても、しが盲ろう者友の会の支援者の関わりを通じて、盲ろうの方の参加が叶いました。盲ろうの方と見える、聞こえる方とでは取得できる情報量に圧倒的な違いがあります。見える、聞こえる方には気づきにくいことですが、今回私たちも鑑賞会を通じて、盲ろうの方にとってその場にいる人数や年齢や性別、部屋の広さなどの情報は、その場の雰囲気や空間を想像するための重要な情報であることを教えていただきました。こうした盲ろうの方の置かれている状況はまだまだ広く知られていません。私たちもそのような中で今回、どのようにして企画概要や意図を伝えることができるのかを考えました。

そして、しが盲ろう者友の会の皆さんは行政を通じて、まだまだ自宅にいる支援の行き届いていない盲ろうの方を探しています。昨今、情報通信技術は進歩しましたが、人の手を直接介さないと情報を得ることが難しい方もいらっしゃいます。盲ろうの方の現状はまだまだ広く知られていません。より多くの人に知っていただくことで、そこから支援の輪が広がり、社会参加の向上に繋がると改めて実感しました。

(佐倉)



しが盲ろう者友の会

インタビュー | 久郷慶子

(NPO 法人しが盲ろう者友の会 理事)

NPO 法人しが盲ろう者友の会の理事の久郷慶子さんは、盲ろうの方々やそのご家族の生活相談や啓発活動をされています。久郷さんに通訳者としての思いや盲ろうの方の現状や課題などを伺ってきました。

(令和元年5月27日 NPO 法人しが盲ろう者友の会事務局にて)

「しが盲ろう者友の会」に関わったきっかけ
私は以前、滋賀県の専任手話通訳者をしていました。そこで先天性の聴覚障害の女性の方と出会いました。

その女性から「私は遺伝性の網膜の病気です。だんだん目が見えなくなってきました。私の2人の姉はすでに見えなくなり、次は私の順番が来る。目が見えなくなるから、白杖が欲しい。日本全国にもそういう仲間がいるはずだから、点字を覚えてコミュニケーションを図っていきたい」と強い希望がありました。その女性は視野狭窄で、その当時は見えており、3センチぐらいの大きな文字を黒マジックで書いて、ファクスを出すということはできていました。しかし、まだ「盲ろう」が言葉として社会的にありませんでしたので、そのような状況の中で本人さんが何度、役場に行かれても「まだマジックでここまで書けるなら、そんなに対策は要らないだろう」という対応でした。盲ろうについてなかなか分かってもらえなかったというのが現実でした。

その当時、聴覚障害、視覚障害の福祉制度はありましたが、聴覚と視覚の重複障害の「盲ろう」という障害についてはあまり知られることがなく、制度の谷間に置かれていました。当事者や支援者が運動をしないと、福祉に繋がっていかなかったという時代でした。1990年ぐらいに東京と大阪の盲ろうの大学生が当時学生だった福島智さんを中心に運動を始め「全国盲ろう者協会」が設立されました。それを知った聴覚障害の彼女は滋賀県で初めて全国盲ろう者協会に入会しました。そこで「触手話（※1）」というコミュニケーションがあることを知り、滋賀県で盲ろう者友の会の拠点をつくろうという流れになり、2001年に5人ほどの盲ろう者と行政や手話サークルのメ

ンバーなど多くの皆さんに助けていただいて、しが盲ろう者友の会を設立しました。

「ああ、これが触手話。手に持って手話をすれば、通じ合うんだ。家族でも通じ合うんだ。仲間でも通じ合うんだ」と初めて新しいコミュニケーションとの出会いがありました。触手話との出会いがしが盲ろう者友の会を設立してから一番大きな意味のあることでした。（※1）触手話とは手話を触って読み取る方法のこと

自分の人生を自分のこととして考える

しが盲ろう者友の会を設立しましたが、盲ろうの人が集まって、ここから社会参加しようと言ったところでどこへ行っているのか分かりませんでした。そこで行政の方から「生活訓練事業（※2）なら、県の事業費として制度があるので、その制度を使われたらいいよ」とアドバイスを頂いて生活訓練事業から始めました。

通訳・介助者の派遣事業も大事です。盲ろうの方は一人で外出はできませんので、外出時の移動介助をしてもらいながら現場へ行く。現場へ行くと通訳介助も必要です。しかし、「自分がどういう社会参加をしたいのか。自分は何がしたいのか。自分の生活をどうしたいのか」という考えを盲ろう者自身が持つことが大事です。盲ろうの方々が生活訓練という場集まって、様々な情報交換をしながら、自分のこととして考えられることを目的としました。

就労についても、まだまだ働きたいけれど、だんだん目が見えなくなってくると、会社の中で物にぶつかるようになり、自力で通勤できなくなり皆さんやむなく退職されます。そういう自分の人生の辛い思いがあるので、退職後、どこか外に出掛けて自分で何か学びま

しょう、趣味をしましょう、と勧めたところでそんなに簡単に前向きに人生を変えられません。まずはそういう辛い思いを共有し合っていないと、なかなか自分のこととして考えられない、次のことが考えられません。しかし、ただ生活訓練の場で、自分の人生論をおしゃべりして、お互いに聞いただけだと「少し見えるからいいよね」、「自分はまったく見えないからいいや」等と、なかなか自分の人生として向き合うことができません。だから、家庭ではできない、自分一人では出来ないことを仲間と一緒にやったらできる、という体験を重ねて次のステップに繋げることが大切です。

体験を積み重ね、継続するためには身近な楽しみを見つけることです。見えなくなり、聞こえなくなり、人との繋がりが少なくなる中で、食べることが楽しみになります。活動をして次に繋がる達成感を味わうためには食べることがないと「次も出かけよう」という気持ちにはなりません。少しでもいいから、達成感を感じて「ここに来れば、これができるんだ」、「みんなと一緒にしたら、こんなことを感じられる」、「でも、これは失敗した」と、成功や失敗したことなどがいろいろ味わえて、体験できるということから生活訓練の調理活動を重ねてきました。最初はまな板や包丁一つでも慎重に選ばれていました。タマネギの



切り方もどうすれば危なくないように切れるだろうかなど、いろいろ工夫を重ねてきました。それが、今ではスムーズに自分の役割を果たし、仕事がないときは休憩をしながら、介助者と世間話をする余裕も出てきました。
(※2) 盲ろう者社会参加促進事業（滋賀県委託事業）

通訳だけではない通訳介助者の役割とは？

私は「自分の思いを自分の言葉で相手に伝える」ことが一番、人間の幸せだと思います。それができないのは本当に悔しいと思います。私たちはコミュニケーションの媒介役というか、中間の役割をせざるを得ないから、通訳者の役割で伝えていますが、通訳者なんてなくてもいい、自分で話せて、自分で答えを聞ける。そういう暮らしがあったらいいなと思います。しかし、それができないから、通訳介助者の役割があります。盲ろうの方の通院付き添いのときは「お医者さんとしゃべりなさいよ。通訳介助者がしゃべったのとは違いますよ。私たちはお医者さんの話を伝える。だから、通訳介助者に伝えるのではなくて、お医者さんとお話をして自分がしんどいときや痛いところは伝えないといけないよね」と言いますが、通訳者の方を向いてしゃべることが習慣になっています。また、お医者さんも盲ろうの方に伝えるのではなく、つい通訳介助者にされるのです。病院で診てもらうのは本人ですが、陰の存在で薄いと感じます。

どんな場面でも、自分の言葉として話せることが、人間にとってどれだけ幸せなことだろうかと思います。しかし、盲ろうの方はそれができない。人を通してしか自分の気持ちを伝えられません。嬉しいとき、悲しいとき、みんなと気持ちを共有し、自分の気持ちを相

手に伝えられたら、どれだけ人として生きる喜びにつながるかと思います。それが普通のことですが、その普通のことできないもどかしさが、盲ろうの人たちと出会って、一番辛いことだと思いました。

それと、もう一つは、長い間、在宅におられると、コミュニケーションの仕方を忘れてしまいます。ある方は自分の名前を出せるまで、支援をしながら2年ほどかかりました。そのときは支援者みんなで涙を流して、喜び合った覚えがあります。人と出会わないとしゃべらない、自分の名前すらも出さなくなる、諦めてしまうのです。

また、別の盲ろうの方はしが盲ろう者友の会に誘い始めて、3年が経過してやっと反応がありました。車の中から窓の景色を見て「今日は寒いよ」、「今日は暑いよ」と言って、手のひらに書き、自分が何か感じたときは、手をぐっと握り返してくれるようになりました。自分の思いを伝えることは障害があってもなくても、人間の当たり前の権利なのに、それを奪われるというのは非常に悲しいことだと思います。だから、少しでも自分の気持ちを相手に伝えられたら、どれだけ嬉しいことかと思います。在宅で長い間過ごされた方で全く反応がなくても、誰でも同じように向き合うことが、しが盲ろう者友の会で一生懸命に取り組んでいることです。



久郷慶子（くごう・けいこ）

NPO法人 しが盲ろう者友の会 事務局（盲ろう者相談員）
1990年（平成2年4月）から滋賀県の専任手話通訳者（非常勤）として2012年（平成24年3月）まで勤務。
2000年（平成13年7月）滋賀県の盲ろう者5人と支援者16人の仲間と「しが盲ろう者友の会」を設立する。